

報告

第 15 回 ジュニアセッション開催

鈴木文二（実行委員：春日部女子高校）

ジュニアセッションが流行している。物理学会、地球惑星科学合同学会など、理数系学会のあちこちで開催されている。発表件数の多少はあるが、各学会の目玉のひとつにもなっているようである。そんな中で、本会が共催している日本天文学会の元祖本舗ジュニアセッションは、たいへんな盛況である。2000年の春季学会から始まって以来、講演数は増え続け、今春の埼玉大学でのセッションでは、81件の発表があった。大学の最も大きな会場を埋め尽くし、500名を越える参加者であった。この数が天文学会全体の参加者の何割にあたるか、計算するのが恐いという研究者の方もいた(笑)。午前午後口頭セッションを振り分け、持ち時間は僅か4分だった。ポスターのコアタイムは昼休みである。いずれも熱気にあふれる高校生の声が響き渡っていた。参加グループは、北海道から九州まで広範囲で、エントリーしている構成も、学校の部活動、SSH、研究機関のアウトリーチグループなど多彩である。発表内容は、装置開発、太陽系、恒星、銀河などオトナの学会に負けないくらい幅広い。



天文学会のジュニアセッションと他の学会との相違点はいくつかある。たぶんそれが、

多くの中・高校生を集め、長続きしている理由だと思う。第一に、顕彰制度のないことがあげられる。このセッションは、天文学に関する生徒の自由な発想と活動の発表の場として始まり、研究者が発表者に対して、直接に質問・コメントを投げかけるという交流を大切にしている。第二に、運営スタッフである。現場の高校教員、大学教員、天文台の職員などが実行委員、世話人となって運営しているから、参加グループ、生徒・児童にとって何が必要か、大切なことは何かを熟知している。上から目線のセッションではないのだ。第三に、公開とアーカイブである。講演申し込みから当日までの非常にタイトな日程のなかで、プログラムを練り、予稿集をつくり、情報をwebで公開する(<http://ursa.phys.kyushu-u.ac.jp/jsession/>)。かなりのサービス精神だと思う。過去の発表もすべて閲覧できるので、これは天文教育の知的財産となりつつある。

中・高校生の発表の場を設けて、お歴々が審査員など務めて、御褒美(表彰)を与えるだけなら、ジュニアセッションはこれほど発展しなかつただろう。天文コミュニティの懐の深さ、教育・普及に対する姿勢、さらにはボランティア精神の賜物と言える。ジュニアセッションと同時に開催されている Astro-HS 全国フォーラム (<http://www.astro-hs.sakura.ne.jp>) も、高校生の交流という路線を明確に打ち出して、ふたつの歯車はうまく噛み合ってきている。何かと「競争」を強いる社会情勢のなかで、「共同」、「協調」、「交流」という旗を掲げ、若者たちへ暖かなエールを送る取り組みに、今後ともご支援をお願いしたい。